

塩曳潟に生息するゼニタナゴの保全活動

飼育展示担当（動物専門員） 阿比留 優一

ゼニタナゴは日本固有の種ですが、外来種の増加や河川の改修、ため池の管理不足などの影響を受けて、存続が脅かされています。現在では、本県を含め岩手県や宮城県などの数県で確認されるのみです。環境省は、これまでも絶滅の危険性が最も高い種としてリストアップしていましたが、さらに法律により保護を図るため、2025年の2月に「特定第一種国内希少野生動植物種」に指定しました。大森山動物園では、2003年に園内にある天然の沼「塩曳潟」で、ゼニタナゴの生息を確認してからこれまで調査や保全に取り組んできました。

1 ゼニタナゴと二枚貝の不思議な関係

ゼニタナゴは、全長8～10cm程度で、ウロコはタナゴ類の中でも極めて小さく特異的です。秋になるとオスは婚姻色と呼ばれる赤紫の光沢のある色になります。メスは9月～10月に二枚貝に産卵します。長い産卵管を貝の出水管に差し込んで、エラに産卵し、同時にオスは貝の入水管の近くに精子を放ち、それが吸い込まれ貝の中で受精します。受精後4～7日で孵化しますが、ウジ虫のような形態の仔魚（しぎょ）として翌年の春まで貝の中で過ごし、5月～6月に貝から泳ぎ出きます。このような繁殖をするため、ゼニタナゴの生息環境には二枚貝の存在が必要不可欠です。



産卵管を伸ばしたメス



産卵のあった二枚貝

2 繁殖への挑戦

2006年にゼニタナゴの保護池を設置し、魚と二枚貝を保護する活動を始めました。この池は、卵から稚魚になるまでの1番弱い期間を守るため造られました。翌年に池内で初めて繁殖し、今日までの18年間にわたって稚魚の保護や繁殖、放流を行いました。沼の水を汲み上げて循環させており、環境が自然に近い状態であり、また外敵がいなかったため繁殖は順調でした。しかし、沼の水に依存しているということは、水質に異常があった場合に生き物が全滅してしまう可能性もあります。そのため、2014年から水槽下で繁殖できないかと考え、挑戦を始めました。二枚貝がゼニタナゴの卵や未熟な状態の仔魚を吐き出してしまうこともありましたが、試行錯誤しながら繁殖に取り組んできました。そして、2020年に稚魚が



ゼニタナゴの稚魚



水槽下で生育したゼニタナゴたち

泳ぎ出ていることを確認し、大森山動物園では初めて水槽下での繁殖、成育に成功しました。この時は残念ながら1尾しか生存しませんでした。2024年には15尾の稚魚を成育させることができました。さらに2024年の秋には、成長した稚魚が二枚貝へ産卵する行動を確認しました。2025年の初夏に生まれてくる予定なので見守っていききたいと思います。

3 保全活動を通して

塩曳潟では絶滅危惧種のシナイモツゴやアカヒレタビラを始め、多くの生き物たちが生息する素晴らしい環境が守られています。ゼニタナゴの保全は単に種を守るだけではなく、多様な生物を育む塩曳潟の自然環境全体の保全につながる活動です。この活動を地域や来園者の皆さまと協働し行い、希少動物の保護や環境の保全について共に考え、情報を発信していきたいと考えています。



来園者と一緒に行った塩曳潟水生生物調査